

幸せの1ページ

2008(平成20)年9月15日鑑賞<梅田ピカデリー>

★★★



監督・脚本＝ジェニファー・フラケット、マーク・レヴィン／原作＝ウェンディ・オルー『NIM'S ISLAND』／出演＝ジョディ・フォスター／アビゲイル・ブレスリン／ジェラルド・バトラー／マイケル・カーマン（角川映画配給／2008年アメリカ映画／96分）

……ラブコメ風のタイトルに騙されてはダメ。これは、お子様向けかつ大人も無邪気に楽しめる冒険映画！ ビッグネームはジョディ・フォスターだが、それを完全に喰ったのが、えらくキレイになったアビゲイル・ブレスリン。彼女の父親を含む、三者三様の冒険をタップリと楽しもう。ちなみに、その後には待っている、幸せの1ページとは……？

なぜ、こんな邦題に？

この映画の原題は、ウェンディ・オルーの原作どおり『NIM'S ISLAND』。つまり、はるか遠い南の孤島に、海洋生物学者の父親ジャック・ルソー（ジェラルド・バトラー）と一緒に住むおてんばだが利口な女の子ニム（アビゲイル・ブレスリン）の物語。

したがって、邦題も基本的にそれを生かすべきだが、『幸せの1ページ』としたのは、映画のラストに「ある結末」が待っているため。しかし、『幸せの1ページ』ではいかにもラブコメ風のタイトルだから、『パニック・ルーム』（02年）や『フライトプラン』（05年）における気丈な母親役が板についてきたジョディ・フォスターが、気分転換にラブコメに挑戦したの？ とつい考えてしまう。なぜ、こんな邦題に……？

アビゲイル・ブレスリンが、えらくキレイに……

この映画の最大の話は、ベストセラー冒険小説の人気作家アレクサンドラ・ローバーを演ずるジョディ・フォスターのコメディタッチな演技だが、完全にそれを喰っているのがニムを演じたアビゲイル・ブレスリンの演技。『リトル・ミス・サンシャ

イン』(06年)で第79回アカデミー賞助演女優賞にノミネートされた時の彼女は、ホントにポッチャリした不細工な女の子だった(『シネマルーム12』414頁参照)が、少女の成長は早いもの。それから2年後の今、スクリーンで観る彼女はイキイキとした表情がピッタリのキレイな女の子に変身!

学校へも行かず父親と2人だけの無人島での生活には、映画ではわからない大変さもあるはずだが、ニムはトドのセルキーやトカゲのフレッドたちとお友達になっているから、毎日が楽しそう。しかも、お友達や自然から、さらに海洋生物学者の父親からいろいろと学んでいたから立派なもの。

そんな日頃の努力(?)のおかげで、新種のプランクトンを採取するため遠くの海に乗り出して行ったジャックが嵐に遭遇したためなかなか島に戻ってこれなくても、また、大きな船に乗ってこの孤島を世俗にまみれた観光地にしようと目論んだキャプテン(マイケル・カーマン)たち御一行が島に乗り込んできても、その対応能力はバッチリ!

メールは便利だが、誤解も……

映画の冒頭、サンフランシスコの自宅で新作の執筆に向かっているアレクサンドラのイライラぶりが映し出される。アレクサンドラが書く冒険小説のヒーロー、アレックス・ローバー(ジェラルド・バトラー)は、インディ・ジョーンズばりの(?)冒険心溢れるおじさん(?)だが、執筆者のアレクサンドラは1匹の小さなクモの出現にもわめき散らすような極端な潔癖症の女性。さらに、郵便物をとるため郵便受けに行くことさえこわがる極度の外出恐怖症の引きこもり女性。

そんなアレクサンドラが新作のアイデアを得るべくメールでアドバイスを求めたのが、ネット検索の中で発見した、孤島の火山のふもとで生活しているという海洋生物学者のジャック。あいにくアレクサンドラからのメールが届いたのは、ジャックが海に乗り出した直後だったが、“アレックス・ローバー”からのメールに気がついたニムが執筆への協力を約束するとメールを返したところから、遠く離れたアレクサンドラとニムの間にメールによる交流が始まることに。メールは便利な文明の利器だが、出会い系サイトによる被害が後を断たないことからわかるように、顔の見えない者同士によるメール交換は時々誤解を生むもの。

嵐の中で父親ジャックとの交信が途絶えたうえ、大量の侵略者たち(?)の登場に



© Copyright Walden Media, LLC. All Rights Reserved.

第3章

意外な設定が興味をひく

悩むニムが、アレックス・ローバーに対して“SOS”のメールを送ったのは当然だが、そこでアレクサンドラが下した一大決心とは？ それは、あれほど外出恐怖症のアレクサンドラが、何と1人でニムが住む孤島へ救出に向かうこと。もちろん、こんなことは現実にはありえない話で、原作者の頭の中だけで勝手に想像を膨らませていった結果生まれてきたストーリー……？

しかし、待てよ。アレクサンドラとニムの間で交わされたメールで、ホントに正確な情報が伝えられているの？ それが、ちょっと心配……。

見どころ その1——ジャックの知恵と生命力

この映画はたわいもない(?)冒険物語を単純に楽しむものだが、映画中盤における見どころは3つある。その第1は、予定どおり新種のプランクトンを発見し採取したところまでは良かったが、その直後大嵐に遭遇してしまったジャックの奮闘ぶり。マストが折れ、エンジンもかからなくなった船でどうやってニムが待つ島まで戻ってくるの？ そんな心配の中で見せる、ジャックの知恵と生命力が映画中盤の第1の見

どころ。

見どころ その2——アレクサンドラの意外なタフさ

サンフランシスコからニムが住む孤島に到着するまでには、飛行機、船、ヘリコプターなどさまざまな輸送手段が必要だが、あの外出恐怖症のアレクサンドラが一体どうやって……？ それで、この映画中盤の第2の見どころ。

映画の中、アレクサンドラとアレクサンドラがつくり出したヒーロー、アレックス・ローバーが同時に登場し、会話するシーンが再三登場する。それにはかなり違和感があるが、嵐の海の中をボートに乗ったジョディ・フォスターが必死でオールをこぐシーンなどは、『パニック・ルーム』や『フライトプラン』で彼女が見せた、わが子を守るためなら何でも、という力強い女性像を彷彿……。

見どころ その3——ニムの島防衛の闘いは？

中盤第3の見どころは、押し寄せてきた観光客によって島が席卷されるのを防止するべく、孤軍奮闘するニムの姿。トカゲのフレッドたちの応援はもちろんだが、火山の噴火を装う演出の壮大さは、張藝謀^{チャン・イーモウ}監督演出による北京五輪の開会式の壮大さにも負けないほど……。

『リトル・ミス・サンシャイン』でアビゲイル・ブレスリンは、ダンスも下手だが動作全般もにぶい女の子を味わい深く演じていたが、『幸せの1ページ』では本来のおてんば娘に戻って(?)、イキイキと男の子顔負けの冒険の数々を。プレスシートでスタント・コーディネーターのグレン・ルーランドが語る、「撮影が終わる頃にはニューヨーク育ちの都会的な女の子から、本物のアクション女優へと変化を遂げたよ」と言うのは少しオーバーだが、ひょっとして彼女の次回作は本格的なアクションに？

私的にはこんな結末に少し異論が……

考えてみれば、この映画は主人公のニムとアレクサンドラがそれぞれ全く違う世界で全く違う行動をとっているから、2人のご対面はラストだけ。また、ジャックとニムの楽しく充実した孤島での生活ぶりが最初に少し紹介されるものの、すぐにジャックはプランクトンの採取のため海へ乗り出していくから、2人の接点も多くはない。

つまり、映画中盤は、前述のとおり三者三様の孤軍奮闘ぶりを、それぞれソロの演技で見せるもの。したがって、嵐の海の上で苦勞に苦勞を重ねたジャックがやっと島へ戻ってくるのは、既に上映時間のほとんどが終わった時。しかしそこには、ニムを救出するためにやってきたにもかかわらず、逆にニムに救出されたアレクサンドラの姿が。しかし、著名な海洋生物学者のジャックと著名な冒険小説家アレクサンドラの名前は互いに知っているから、そこは大人同士……。そして男と女……。

さて、そこに訪れるエンディングとは？ 私的にはこんな結末に少し異論もあるが、まあいいか……。

2008(平成20)年9月16日記

ミニコラム

いずれは脚本づくりの一翼を！

『0（ゼロ）からの風』（07年）についての意見交換以降、交友が深まったのが塩屋俊監督。彼の最新作『きみに届く声』ではラストシーンについて厳しい意見を述べ、『0（ゼロ）からの風』でも法廷シーンの不十分さを指摘していたためか、08年末に1本の脚本について意見を求められた。内容はここではマル秘だが、その第1稿はシンプルながら実に面白い物語。まずは私の意見をまとめ、妻や事務局長と食事しながら「この人物像やこの行動は不自然」「こんな筋の方が面白い」と言いたい放題の議論を大展開。それをまとめて送ると、半分お世辞だろうが「痛いところを突かれた。意見を参考に第2稿を考える」との返事が。こんなやりと

りを踏まえると、最近恒例となった大阪で1番旨い焼肉店「万両」での食事会の話題が白熱化することに。そのうえ「あの役にはAの俳優を」「Bの俳優にするなら、あそこの筋は変更した方が」など議論が実践的になってくるから面白い。なるほど、脚本づくりはこのようにして進めるのか！「映画評論の趣味が昂じていつか映画監督を！」という無謀な夢を私は一切持っていないが、こんな体験をすると「脚本づくりなら俺だって！」と思えてくる。これ以上映画関係の時間が増えるとは本業がヤバいが、いつかは私も脚本づくりの一翼を！

2009（平成21）年2月19日記